石見銀山遺跡ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site　NOVEMBER 2003　NO.6

平成15年11月1日発行　第6号

島根県・大田市・仁摩町・温泉津町教育委員会

【石州大森鉱山永久工場全景】
（現在の仁摩町柑子谷　明治末年ころ）

>> Contents

page 2　総合調査から
　(1) 遺跡発掘調査　大田市　中田健一
　(2) 文 献 調 査　和田美幸
　(3) 石 造 物 調 査　石造物部会
5　街道調査
　建造物調査（第３次）　浅川滋男
　街道踏査　大門克典
　文献調査　佐伯徳哉
8　第2回石見銀山講座開催！　渕橋洋祐
9　重要文化財旧熊谷家住宅保存活用事業　林泰州
10　町並みを歩く（5）～町並みを高台から眺める～　三谷岳史
11　街道を歩く～本因坊道策の家～　的野克之
12　鏝絵の魅力④　渡部孝幸
13　温泉津町からのほっと情報　町並み工房　重田聡
13～14　石見銀山遺跡調査活動日誌抄
14　石見銀山遺跡の世界遺産登録に向けて　世界遺産登録推進室長　岸本豪郎

(1)発掘調査

大田市
中田　健一

平成15年度の発掘調査は、宮ノ前地区、本谷地区、下河原地区、出土谷地区で行っています。いずれもトレンチ（試掘坑）による確認調査です。

「本間歩」「釜屋間歩」「大久保間歩」といった石見銀山を代表する坑道がある本谷では、今年度から発掘調査に着手しました。

▲宮ノ前地区

「本間歩」の付近に設定したトレンチでは、東西方向に大きな露頭掘りがある部分の谷底を掘り下げました。

調査の結果、最初に検出した遺構の面で江戸時代初めの建物を検出。銀山最盛期そのままの状態で建物が埋まっていった様子を確認しました。さらに、掘り下げたところ、遺構面が7面以上あり、下層では16世紀末の陶磁器が出土しました。

▲下河原地区

▲釜屋間歩と石段

また、「釜屋間歩」では、周囲の竹を除去したところ、「釜屋間歩」の西側で岩盤に直接掘られた石段が、高さ約20mにわたって造られていたことがわかりました。また、トレンチからは、金属の塊が出土しました。これから金属塊の分析を行います。

宮ノ前地区では江戸時代初めの建物跡と石垣を検出。遺跡の広がりを確認中です。下河原地区では、厚く堆積した江戸時代初めのズリ・カラミの層の下から、建材とみられる木製品を伴って建物跡が検出されています。

こうした調査の結果を検討することによって、石見銀山の最盛期といわれる時期の銀山全体の様子がさらに具体的になっていきます。一般公開の現地見学会は11月30日に開催する予定です。

▲釜屋間歩付近調査風景

(2)文献調査

和田　美幸

江戸時代の石見銀山には鉱山経営を専門とする地役人と呼ばれる役人が抱えられており、江戸時代中期頃には80人余りいたようです。地役人は石見銀山が徳川幕府の直轄地となった後すぐ、大久保長安が奉行であった時に抱えられた者が多く、その中でも吉岡隼人・宗岡弥右衛門は大久保長安の支配下にあった佐渡・伊豆の鉱山経営にも関わり、その功績によって将軍にお目見えし、それぞれ吉岡出雲・宗岡佐渡の名を賜っています。

長安は石見・佐渡・伊豆の間での役人の移動、鉱石のやり取りなどの交流を行うことで互いに技術・経営を向上させ増産を図りました。このような支配について知ることができる史料はこれまでにもいつくかの家で確認されており、石見・佐渡の交流についてもよく知られるところでありますが(1)、地役人の子孫である阿部家での調査で、長安から宗岡佐渡へ宛てた文書9点が新たに確認できたことは、大きな成果と言えるでしょう。

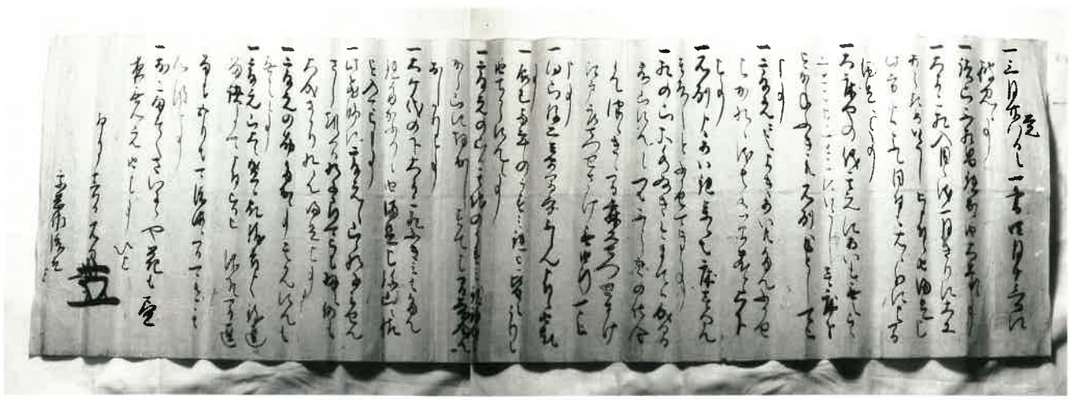
宗岡佐渡は由緒書によれば慶長8年（1603）に佐渡へ渡り、同19年に佐渡で亡くなるまでの間、佐渡金銀山の経営に携わりました。今回確認した書状のほとんどは佐渡国在住の宗岡佐渡に宛てたもので、内容も佐渡金銀山の経営に関するものです。長安は書状の頻繁なやり取りによって佐渡・伊豆・石見の状況について情報収集し、それぞれに伝達していました。とくに石見の情報については吉岡出雲などの地役人から長安へ伝えられ、開発中の間歩が増産したとか、石見銀山の盛山を将軍が喜んでいることなど細かく宗岡佐渡へ伝達されていたことが分かります。

とくに書状によく見えるのは、鉱石のやり取りや製錬に関することです。長安が石見で設けた「佐渡より参候」「石州より佐渡へ越候鏈」（鏈＝鉱石）という役割分担でも、宗岡氏が割り当てられています。石見から佐渡へ送る鏈については吉岡氏が分担していますが、吉岡氏も一時期佐渡へ渡り、「（吉岡）出雲才覚ニて大分くさり売切候」つまり出雲の手腕で鉱石を売り切った、などと長安が石見の吉岡子息へ伝えています(2)。

佐渡にいる宗岡氏への書状では「大床やの儀、其元にあいも無之候ハヽ二とこを一とこにいたし、壱床分をかねふき共石州へもとし可被申事」「石州よりあい鏈参候者、床壱つにてそろそろとふかせ可被申事」つまり二床での製錬が採算に合わなければ一床をかねふき（銀吹）とも石州へ戻すように、石州の鏈が来たら一床で精錬をするように、などと石見の鉱石を佐渡で吹かせ、銀吹も佐渡へ送っていたことが分かり興味深いと思います。

このようなやり取りの鉱山開発への影響や、各鉱山の相違点など、ほかの史料と合わせながら読んでいくことが今後の課題の一つです。

(1) 田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』（刀水書房1986）
村上　直「佐渡金山の開発と吉岡出雲」（『佐渡史学』第9集1971）
(2) 村上　直・田中圭一・江面龍雄『江戸幕府石見銀山史料』（雄山閣1978）



▲年未詳 卯月十六日　大久保長安書状

(3)石造物調査

……大森地区を分布調査する

石造物調査部会

石造物調査部会ではここ数年、石見銀山遺跡の分布調査を続けて来ました。山中を踏査し、どんな形の石造物がどれほど存在するのか、概数をつかむための活動です。これまでに山内地区の調査をほぼ終え、約5,800基の石造物があることが分かりました。

今年度は7月に開催した部会で、いつもは悉皆調査を行う8月後半、大森地区の分布調査を行うことを決めました。大森は銀山の開発とともに成立・発展した町ですが、この地区の石造物の様子は案外分かっていません。現地調査は立正大学教授池上悟氏と同大学の学生5名が担当し、地元からは宮本徳昭氏と大森を中心に集まった調査補助員５名が加わり、二グループに分かれて8／25～29の5日間行いました。

▲分布調査の様子

最終日には当遺跡調査整備委員会委員の田中義昭氏を座長に検討会が開かれ、成果のあらましが報告されました。主な成果には大森地区全体で石造物がおよそ5,000基存在する、分布状況は大森の谷筋を境にして多くは西側の丘陵部に集中する、年代的にみると17世紀から形成され、18世紀世紀の終わりから19世紀前半にかけてピークがある、今回確認された最も古い紀年銘は元和三年（1617）である、特異なものとして明治20年代の陶製の墓標が見つかった、などが挙げられます。

また、当日は春以来宮本氏が中心になって調査した大森町羅漢寺の五百羅漢像や温泉津町沖泊地区の分布調査の結果が併せて報告されました。それから今回の調査で面白い墓標を確認したことを付け加えておきます。願龍寺の裏山を踏査中、高さ38cmの方柱状の墓石に「猫之塚／橋本氏飼猫名虎／弘化四年（1847）五月二十四日」と銘文があるのを発見。大きさは子供の墓石とそう変わりませんし、正面には蓮弁が刻まれた立派な墓標です。幕末期、橋本氏はよほどの愛猫家であったのでしょう、手を合わせ実測して帰ることにしました。

▲検討会の様子

▲幕末の猫塚

建造物調査(第3次)

浅川　滋男

本年度は冠集落と清水集落の民家・庫裡・井戸を調査しました。

冠は銀山からすると西北の向きにある山あいの散村です。ここは江戸初期の国絵図に見える、銀山畑口と海辺の馬路を結ぶ古道に沿った地区と推定されています。集落を構成する民家は大半が瓦葺きになっていますが、それらの多くはかつて茅葺きでした。田中家住宅（空家）は往時の姿をとどめる数少ない茅葺き民家です。主屋は間口6間×奥行4間と小振りで、平面は整形四間取り。表側の二部屋と裏側の二部屋の境となる間仕切りは棟通りではなく、その半間裏側を通り、この筋に大黒柱をたてています。正面半間に瓦葺きの下屋を設け、表側に八畳を二間配する一方、裏側では背面の下屋を取り込んで六畳を二間設けているのです。建築年代を確定する資料はありませんが、幕末頃の建造と推定されます。

◀田中家遠景

同じく冠の弓場家は間口7間半×奥行4間半の瓦葺き民家です。昭和15年に購入した住宅で、移築時にはすでに瓦葺きであったそうですが、平面はあきらかに茅葺き民家の間取りをしています。8畳の部屋を田の字に並べた整形四間取りで、正面には幅半間の下屋を通しています。建築年代はやはり幕末～明治初と推定されます。田中家のような茅葺き民家がこのような瓦葺きに変化していったものでしょう。

冠にある松源寺は、大森銀山と縁の深い古刹です。もとは天台宗光明寺末の松源院でしたが、永禄四年（1561）に浄土真宗に改宗しました。本堂は大正四年に焼失、同七年に再建されています。一方、庫裡は明治初めに焼失しましたが、昭和48年、本経寺の庫裡をもらいうけて再建されました。大国の本経寺はもとは大森にあった日蓮宗の寺院です。ところが、昭和40年代に廃寺となり、庫裡は解体されて、その古材は松源寺のものとなりました。柱・胴差などは今でもよく保存されています。当初の建築年代は不明ですが、大国に残る本経寺本堂の様式が幕末を示しており、庫裡もそれに近い年代に建設されたものかもしれません。

▲弓場家

湯里の清水集落は、その名の通り「清水」によって生まれた山あいの集落です。古道に沿う集落の中心にカナビシャクと呼ばれる井戸があり、小さな不動明王像を祀っています。かつては「水神さま」と呼んでいたそうです。一説には、かつて参勤交替の際、大名がここで休憩し、カネのヒシャクを作ったのでカナビシャクと呼ばれるようになったとか。苔むした石垣と石畳そして巨石に包まれた湧水の空間が、なんともいえない清涼感と聖性を感じさせます。カナビシャクのすぐ下手にある新治家住宅は、この集落では最も古い民家です。今からおよそ100年前、すなわち明治中晩期の建築です。瓦葺き屋根を支える和小屋の梁はとても太く、玄関に入った瞬間にその迫力に圧倒されるでしょう。

▲カナビシャク

街道踏査

……踏査で見つけた街道の魅力～降路坂、謎の石垣道～

温泉津町教育委員会 大門　克典

■はじめに

銀山街道の西田五老橋から銀山柵ノ内に向かう急峻な峠を降路坂（ごうろざか）とよびます。この降路坂に謎の石垣道が現れます。謎の石垣道とは降路坂の山腹に築かれた道幅2間（約3.6m）の旧道で、この道がルートの確定に大きな“謎”を投げかけているのです。

▲五老橋から降路坂に向って1km付近
五老川の右岸、街道沿に位置する石垣

■調査の目的

銀山坂根口・温泉津ルートの踏査が本格的に始まったのは、今年の4月でした。このルートは、昭和53年には中国自然歩道として整備されており、銀山街道として広く認知されています。しかし、昭和18年の水害で、このあたり一帯が大きな被害を受けたため現在の自然歩道がかつての銀山街道と一致しているかどうか確かめる必要があると考え、改めて念入りな調査を実施することにしました。

■街道調査

この調査には街道調査員の池橋達雄先生、多田房明先生にご尽力いただき、4ヶ月で調査を行いました。調査の基本資料となる西田地区の字切図（明治21年）と地籍、1／5000の地形図を用意し事前のデスクワークを行った結果、五老橋から降路坂の区間には、現道の自然歩道沿いに謎の道が存在することが判明しました。「これがかつての銀山街道だろうか？」と一同期待に胸を膨らませ、調査を開始しました。

石垣道は降路坂の入口・五老橋から五老川の左岸を中国自然歩道と平行し、途中右岸へと移動します。そして、再び左岸へ移ると坂の中腹（題目塔付近）で大田市水上町三久須方面の山中に丁寧なつづら折りで続き、山頂付近まで登り突然姿を消します。石垣道はそのほとんどが雑木や薮で隠れていますが、道幅や緩やかな勾配、整然と築かれた石垣から、その立派さが伺えます。重層的に配された石垣は、まるで要塞を思わせる姿です。地元の古老に聞いてみると、「昔、西田から三久須へこの道を使って人力車で嫁いだ者がいた。後にも先にも一度きりだった。」とか「浜田連隊が三瓶に向かった道ではないだろうか。」といった情報が得られましたが、それ以上のものは得られず謎が残りました。

■おわりに

結局、この道は石垣が近代的なこと、途中で途絶えていることなど不明な点が多いことから、銀山街道であるという証明は出来ませんでした。しかし、この調査がきっかけとなり、埋もれていこうとする道の遺構を発見することが出来たことはたいへんな収穫でした。池橋調査員はこの「謎の道」について独自に文献調査をされ、概ね納得のいく調査を終えたと報告がありました。この石垣道が一体何であれ、これほどの大規模な道が街沿いにあることが判明し、また資料として残すことができたことは大きな成果と言えるでしょう。出来れば何らかの保存対策が成されることを期待してやみません。人々の記憶からも消え去ろうとしていた謎の石垣道は、世界遺産登録時には文化的景観という新たな役割を持ち、降路坂をより魅力的に演出することでしょう。

▲三久須方面へつづら折りで登る石垣道（題目塔付近）
7段のつづら折りが確認された。

文献調査

……温泉津・沖泊の港から銀山への道

世界遺産登録推進室 佐伯　徳哉

銀山から降路坂を下り、西田を経由して温泉津・沖泊に至る経路が、戦国時代の毛利氏支配時代から、概ね近世にも幹線路として供用されていたことは広く知られているところです。

1526年、博多商人神屋寿禎が、海路出雲国に向かう途中、船上から霊光を見て銀山を「発見」した後、最初に仙ノ山の観音参りのために上陸したのは「温泉津湊」であったと『銀山旧記』には記されています。一方、この直後から銀鉱石を、博多まで運ぶために搬出した港が、「灘・古龍・鞆岩の浦」（現在の仁摩町馬路友とその付近）であったことも多く知られています。

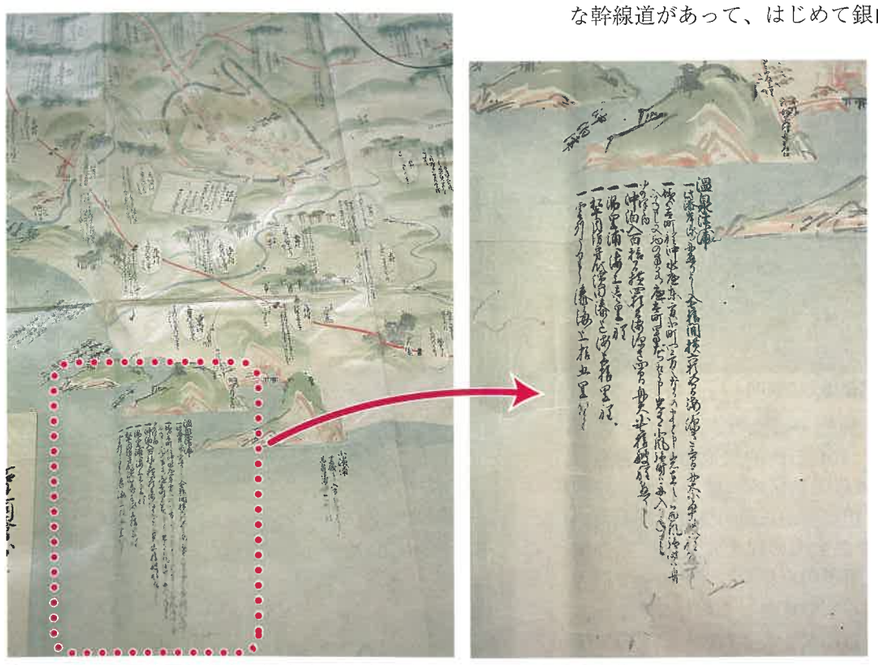
温泉津は、この発見後半世紀ばかり後に、毛利氏が奉行を置いて鵜丸城を築き港を整備しますが、寿禎の温泉津湊上陸の記事は、それ以前から、すでに温泉津が遠隔航路の寄港地であり、のちに銀山となる地域への入り口であったことを伺わせる記述です。

さて、温泉津の沖泊は毛利氏の時代（1562年頃～1600年）に銀が搬出された湊と伝えられますが、現在、いわゆる温泉津温泉街側と比べてひなびた集落である沖泊が、往時はかなり賑やかに船が出入りしていたことを伺わせる資料があります。正保の『石見国絵図』（津和野町教育委員会蔵）の中にその記述があります。

1640年代に作成されたこの絵図には、「温泉津浦　一、此湊岸深ク舟懸リよし、入七拾間・横六拾五間、海ノ深さ三間、舟大小五十艘程掛可申候」「ゆの津之内　一、沖泊入百間・横四拾間、海深さ四間、舟大小七拾艘程懸り申候」とあります。ひらたく言えば、「温泉津浦は深くて舟をつけやすい、入り江の奥行き126m、幅117m、海の深さ5.4m、舟を大小あわせて50艘ばかり停泊させることができる。一方、温泉津の内にある沖泊は、入り江の奥行き180m、幅72m、海の深さ7.2m、舟を大小あわせて70艘ばかり停泊させることができる。」ということです。温泉津の内でも沖泊の方が温泉津浦よりも海が深く、4割も多くの舟を停泊させることができる港湾であったことがわかりますし、実際に、荷の上げ下ろしなどで大変賑わっていたのでしょう。温泉津は、山陰屈指の港湾でしたから、その中でも沖泊は大変優良な港であったことが伺えます。おそらくは、喫水から下が深い大船をつけることができたでしょう。

このような輸送力を見込めたがゆえに、毛利氏は、あの長く険しい坂道である降路坂を含めて銀山への幹線道にしたのでしょうし、温泉津や坂の手前の西田町に奉行を置いて重視したのでしょう。このような幹線道があって、はじめて銀山の生産活動や都市型生活を支えることができたと考えられます。

さて、それでは、周防の大内氏が石見国を支配していた銀山「発見」当時、神屋寿貞が温泉津ではなく鞆ヶ浦付近を銀鉱石の搬出港としたのはなぜだったのでしょうか。新たな課題が生まれます。



▲『正保石見国絵図』銀山、温泉津、沖泊付近　津和野町教育委員会蔵

第２回石見銀山講座開催！

大田市外２町広域行政組合　企画担当　**渕橋　洋祐**

8月17日(日)～21日(木)、全国から歴史・考古・建築等を専攻する大学生・大学院生45名の参加を受け、国立三瓶青年の家（大田市山口町）を主会場に、「第2回石見銀山講座」を開催しました。

大田市外2町広域行政組合企画担当では、将来の石見銀山遺跡の研究者を育成し、また、石見銀山の情報を全国に発信することを目的に、昨年からこの講座を開催しています。

◀約２００人が参加した一般公開講座。「外国人の見た石見銀山」（講師：村井章介教授）

初日は、開講式をおこなった後、地元島根県の田中義昭氏（元島根大学教授）による基調講演「銀・銅・鉄と島根の遺跡」で講座の幕を開けました。

2日目のフィールドワークでは、石見銀山遺跡の中で最もスケールの大きな生産遺跡のひとつである「大久保間歩」のほか、「龍源寺間歩」、灰吹銀の出土した「出土谷遺跡」、明治の産業遺跡「清水谷製錬所跡」など多彩な遺跡を巡りました。

▲出土谷地区の発掘現場での説明（フィールドワーク）

3日目の午前中は、発掘・石造物・文献など総合調査の最新の成果や、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている大森銀山地区内の建造物保存修理の工法などについて、担当者から説明を受けました。午後は、町並みの中で最大級の民家重文「旧熊谷家住宅」の保存修理の工事現場を見学し、その後で熊谷家の家財収蔵庫で「熊谷家の家財とくらし」をテーマとした、小泉和子氏（京都女子大学教授）による実際の家財を教材とした講義（公開講座）を受講しました。

▲学生も参加した「熊谷家の家財とくらし」の受講風景

この日の夜は、県立男女共同参画センター「あすてらす」で開催した村井章介氏（東京大学教授）による公開講座「外国人の見た石見銀山」を、一般参加者約150人とともに聴講しました。

講座では、海外で描かれた古絵図から、16世紀のヨーロッパ人にとって、日本の中で名のとおっていたのは「石見銀山」だけであったという研究成果などが示されました。

4日目の午前中は、村上隆氏（奈良文化財研究所主任研究官）による講義「近世金属生産遺跡の科学的調査」で自然科学と石見銀山遺跡について学び、マイクロスコープを使って実際に遺物を観察するなど「鉱山」についての理解を深めました。

午後は、銀鉱石の積出港である仁摩町の「鞆ヶ浦」や温泉津町の「沖泊」を見学し、重要伝統的建造物群保存地区の選定をめざす温泉津町の町並みを現地見学しました。

最終日は、閉講式の後、主会場であった三瓶山の歴史も学んでもらおうと、中村唯史氏（島根県立三瓶自然館指導員）による講義「三瓶の自然」に続き、三瓶自然館、小豆原埋没林公園の見学も行ったところです。

4泊5日の日程で、各分野の講師陣の講義を受け、また、実際に石見銀山遺跡の現地をくまなく見学できる本講座が、未来の研究者への夢を大きく切り開くきっかけとなることを期待しています。

▲清水谷製錬所跡の見学（フィールドワーク）

重要文化財旧熊谷家住宅保存活用事業

平成13年度～17年度までを期間とするこの事業の主な項目は、①主屋・土蔵（5棟）などの復原修理、②多面的な文化財調査、③修理後の活用策の検討と試行の3点です。これまでの事業概要をご紹介しましょう。

①復原に関する調査と復原方針

復原修理工事の手始めは解体工事。変遷を物語る痕跡は外から見えないところにもたくさんあるため、解体工事は建物の変遷を解明する千載一遇の機会といえます。痕跡調査は約1年にわたって行ないました。その結果、戦後に小さくなってしまった台所に使われていた部材を特定でき、元来の規模や構造がほぼ判りました。

並行して実施した遺構確認調査では、幕末から明治初年の屋敷を描いた古絵図（明治5年作）に描かれた建物が実在したかどうか、特に台所と土間周辺の遺構確認を行いました。検出された遺構と古絵図を照合したところ、ほぼ古絵図のとおりであることが確認されました。さらにそれより古い建物の遺構も確認できましたし、存在が伝えられていた地下蔵も確認でき、全面的に発掘しました。

併せて大正・昭和初期の古写真の分析、戦前・戦後に住み込みで働いておられた方々の聞取り調査、建物の類例調査などを実施し、各々の調査成果を総合的に検討した結果、寛政12年（1800）の大火で焼失した後に主屋などを再建し、その後土蔵の新築や移築、台所や蔵前座敷の拡張など順次増改築がおこなわれ、幕末に屋敷が最大規模となったことが解明されました。

この成果をもとに今回の工事では屋敷地の景観が最も整った江戸末期から明治初年の姿に復旧整備することになりました。

②多面的な文化財調査

保存修理をきっかけにして多方面にわたる調査が進んでいます。石見銀山遺跡総合調査の一環として熊谷家の古文書調査や熊谷家の墓地を対象とした石造物調査を実施していますし、大田市水上町にある文化財収蔵庫では熊谷家が日常使っていた道具類を中心に3,270点を対象にした家財の調査と、襖の下張りに使われていた古文書採取作業も進めています。

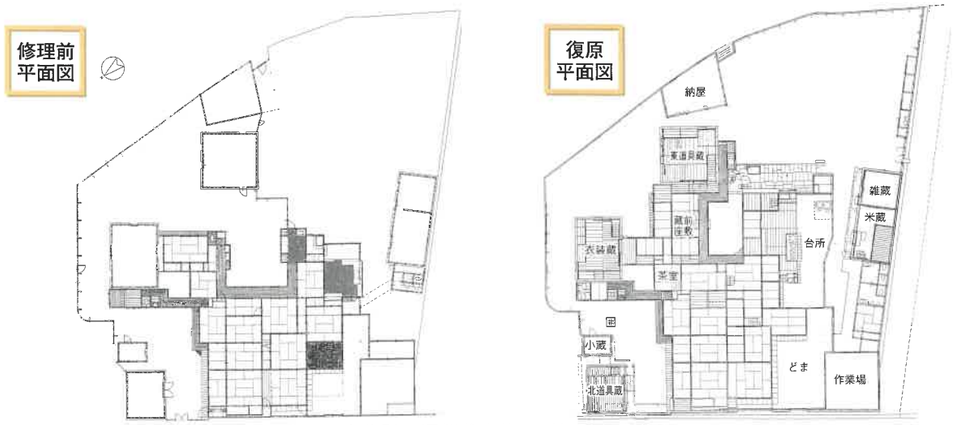
解体工事がほぼ終了した主屋。台所や地下蔵の発掘調査も行いました。

③活用計画づくり

これまでに8回開催しました検討委員会では、旧熊谷家住宅を「石見銀山の歴史の中の熊谷家と町並みとくらしを踏まえて様々に活用する施設」と位置づけ、くらしと歴史の「保存」・子どもたちに伝えていく「教育」・文化財に親しむ「活用」、これらを市民の手ですすめる活動をここで展開する方向で検討しています。

市民参画による企画・運営をすすめる組織をつくり、地道に活動し、継続性を重視した活用をすすめること、飲食・物販に関しては商業的すぎない程度に取り組むこと、暮らしを伝える「熊谷家学」を学校教育に取り入れること、などの方向性を打ち出しています。建物の一般公開、展示も行いますが、見学者への温かいもてなしができる大田市の迎賓館となり得るよう検討しています。今後は周辺整備や運営主体、入場料など詳細について検討する予定です。

（大田市　林泰州）



▲重要文化財　旧熊谷家住宅　他5棟保存修理工事

町並みを歩く 5

～町並みを高台から眺める～

代官所跡から町並みをしばらく歩いて行くと、岩山の上に石城山観世音寺の朱塗りの山門が見えてきます。

観世音寺は、細長く続く町並みが「く」の字に曲がる位置にあるため町並みの大部分が見渡せますし、簡単に登れるため絶好の撮影ポイントになっています。

また町並みの瓦屋根が手に取るように見渡せますから、道なりに歩いただけでは気づかない景色に出会うことができます。

目を凝らしてみると様々な瓦が使われていることが分かりますが、古いいぶし瓦や赤瓦（石州瓦）が葺かれている屋根には時代を越えてきたなんともいえない表情があります。

かつて瓦は貴重品だったため、数が足らない時には種類や色合いの違いを気にせずに混ぜて使用することもありました。

赤瓦だけを取り上げてみても、登り窯で焼いたため一枚ずつ色合いや癖が微妙に違っており、光の当たり方によっては色合いにいっそう深みが増します。

町並みを高台から眺められる場所としては、他に井戸神社の境内や栄泉寺境内、山吹城跡などがありますが、歩くだけでは見えない瓦屋根も随分と楽しめる材料になるものです。　（大田市　三谷岳史）

〈北方向〉

妙連寺や西性寺の大きな屋根、町並みの瓦屋根越しに重文旧熊谷家の修理現場、そして城上神社あたりまでが視界に入る。

〈南方向〉

足もとの銀山川や旧大森区裁判所から駒の足、羅漢町に連なる瓦屋根、右手の山すそには栄泉寺の本堂、谷間の向こうに仙ノ山を見ることができる。

境内からの眺め

観世音寺は真言宗。大森代官所の祈願寺として創建されたと伝えられる。
寛政12年（1800）3月の大火で焼失。安政7年（1860）再建。

〈修理前〉

〈修理後〉

玄関右手の中連ガラス戸部分にかつて式台があった古写真が見つかり、また解体中に痕跡も確認できたことから、式台を復元することとした。

野澤家主屋・土塀
ハ148―1（KoW1）

江戸末期の建築（推定）

建物は駒の足、銀山に向かう街道の西側に位置しており、地役人の福本家や野澤家が屋敷地として使用していました。現在の建物の建築時期は修理中の痕跡などから江戸末期だと思われます。

建物の配置は敷地奥に主屋、それを囲むように門付土塀を巡らし、前庭、中庭、土蔵、上便所を配しています。これらの状況から当初は武家住宅と考えていましたが、部分解体の過程で3間の通り土間があったことがわかり、当初は商家として建てられた可能性もあります。

解体途中の痕跡調査。残された柱から式台の痕跡を確認している。

街道を歩く ―本因坊道策の生家―

島根県文化振興課　主任学芸員　的野　克之

今回は、仁摩町馬路の山﨑家に伝わる碁の名人本因坊道策の関係資料を紹介します。江戸時代初期、山﨑家二代目の善右衛門は石見銀山に深く関わり、それ以降山﨑家は銀山経営に無くてはならない存在となってゆきます。本因坊道策はその善右衛門の長男七右衛門の次男として正保2年（1645）に石見国馬路村（現仁摩町馬路）で生まれています。

①道策が使用したと伝えられる碁盤と碁石

数年前から小中学生の間で碁がちょっとしたブームになっていたことをご存じでしょうか。これは『少年ジャンプ』（集英社）に連載されていた『ヒカルの碁』（原作：ほったゆみ・漫画：小畑健）の人気がきっかけになったものです。主人公進藤ヒカルが碁に目覚めプロを目指してゆくストーリーですが、ヒカルに碁を教える人物が平安時代の天才棋士藤原左為（空想上の人物）の幽霊というユニークな設定になっています。左為がヒカルに碁を教える前は、本因坊秀策（実在の人物）に教えていたことになっており、漫画の中でヒカルは秀策の因島にある墓を参っています。因島には秀策の記念館もあるのですが、『ヒカルの碁』連載以降家族連れの観光客で賑わっているそうです。山﨑家十三代目当主の尚志氏によると、近年道策の遺品を見るために数多くの若者達が山﨑家を訪ねているようです。これも『ヒカルの碁』の影響があるのかも知れません。

②道策入門時の肖像画

さて、道策は7歳の頃から碁を学びに行き、家に帰ると母から今日学んだ事を聞かれ、答えられないと裏井戸で水を浴びせられたと言います。山﨑家には道策が幼少期に使っていたと言われる碁盤と碁石（写真①）が残されています。13歳になると本因坊道悦に入門しますが、入門時の肖像と言われる作品（写真②）が山﨑家に伝わっています。道策は延宝5年（1677）に本因坊家を継いでいます。現在、本因坊は碁のタイトルですが、元は算砂を初代とする碁の家元です。世襲制で道策は4世、先程の秀策は14世です。道策が碁の世界で名前を残したのは単に強いだけでなく、碁の手法に革命的な進歩をもたらし、近代碁の祖とされるからです。現代の棋士達も道策の棋譜を学び研究しています。

山﨑家には道策が床几に肘をつきゆったりと休息する肖像画（写真③）も伝わりますが、これはそのポーズから柿本人麿像を意識して制作されたものと考えられます。かつて歌聖である人麿の像を祀って歌を献ずる「人麿影供」が盛んに行われましたが、同じく碁聖といわれた道策の肖像を掛け、その前で碁に関する様々な催しが行われたのでしょう。

③道策肖像画

鏝絵の魅力④

渡部孝幸

鏝絵の案内をしている時、「かつては優れた左官がいて多くの作品が残されてますが、今では造る人がいますか」とよく聞かれます。

鏝絵の調査をはじめた頃は、いませんと答えていましたが、最近では挑戦している左官がいますといい、制作現場へ案内することにしています。

仁摩町馬路は石州左官の故郷です。また、松浦栄吉や井沼田助四郎など、近代建築の礎を担った左官職人の出身地です。

近年、元診療所だった建物が地域活動の拠点・高山会館として整備され活用されています。その施設の一室で鏝絵製作が行われています。主は、左官職人の松浦満幸（52）さんです。

彼は、'96年頃から地元の若い衆が作る「鏝絵を蘇らせる会」のメンバーとして安心院など先進地へ出かけ、自分たちで作ってみようと挑戦。文化祭などで作品を発表したことがあります。

その後、地元満行寺の屋根替えの工事に併せて鏝絵を寄贈することになりました。満行寺は国道９号線から少し海沿いに寄った、馬路の集落と日本海の海原が眼下に見渡せる眺めのいい所にあります。

題材は、先代住職の石水秋香さんが本でヒントを得て「天人」になりました。

制作は、下絵を描くことから始まりました。さらに、原寸の四分の一程度の大きさの模型を作り、色や見上げたときの形、色漆喰の作り方などについて様々な検討が行われ、5色の顔料から10色の色漆喰を調合。銅線や板に麻縄を巻き付け「天人」の芯を作り、砂漆喰で形を整え最後に色漆喰を塗って仕上げていきます。

▶▼琴姫

▲池月

作業は、屋根替えが終わった'97年（平成9年）7月頃から始まりました。一日の仕事を終えた夕方や土曜、日曜を使い、3ヶ月後の10月初めに完成しました。

私も作業中何度も足を運び進み具合を見守りました。現代の左官にとっては初めての経験でわからないことが多く試行錯誤の作業であったとか。特に目の向きを描くのに苦労したといいます。

▲天人

近年実施された県の中山間活性化事業では、馬路のまちづくりに鏝絵をテーマにしています。

この事業では、鏝絵教室や鏝絵制作が行われますが、鏝絵教室は、満幸さんの指導で今年の正月、小学生から大人まで30数人が挑戦、乙見神社の奉納「大足半（おおあしなか）」を町中を引きまわす風景を描いています。1.8m×1.8mの大作です。

鏝絵制作では、この地にまつわる3つの作品を造ることにしており、既に名馬「池月」が仕上がり当会館の壁に取り付けられています。二作目の「琴姫」は先ごろ完成したばかりで、11月の文化祭にあわせ琴ヶ浜会館の壁に飾る予定になっています。三作目として、この地方に最も多い「龍」にとりかかったところです。

■温泉津町からのほっと情報 ――「町並み工房」

▶温泉津町中心地図

温泉津では「お薬師まつり」の日となる7月7日、“温泉津の町並み保存を推進するとともに、まちづくりについて住民と一緒になって考えていく拠点となるように”という思いから、町並み保存予定地区内の民家の一室を借りて『町並み工房』（町並み保存推進事務所）を開設しました。

温泉津の町並みは、平成9・10年度にかけて「伝統的建造物群保存対策調査」が実施され、江戸時代後期から昭和初期までのそれぞれの時代を反映した建物群が適度に混在して調和のある歴史的風致を形成していることが評価されました。また道や水路、屋敷地で構成される町の構造も17世紀の形態が大きな変化もなく継承されていること、町を造るのに条件の悪い狭い谷でありながら岩盤を削って屋敷地を広げるなどの努力の跡や、古道、石造物などその歴史的遺産が数多く残されていることが確認されています。

さらに温泉津はその名が示すとおり、千年以上前から湧出していると伝えられる温泉と、山陰屈指の天然の良港(津)を擁し、石見銀山の外港として、また北前船の寄港地として大いに繁栄した町でした。

しかし、近年は過疎・高齢化により空家も増え、取り壊されて駐車場へと変わっていくことも少なくありません。

埋もれた価値は放っておいても生かされないし、失うと戻ってきません。みんなが協力し努力をしなければ守っていくこともできません。温泉津の価値を未来へと継承していくため、町並み保存とまちづくりについて、いっしょに考える場になればと思います。（重田聡）

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

上半期・平成15年4月～平成15年9月

4/1	市）世界遺産登録へ向け石見銀山課体制整備（2名増員）
4/3	市町）街道現地調査
4/7	県市町）街道調査現地指導会（於:西田）
4/11	県市町打ち合わせ　（於:大田市）
4/12	県市町）街道調査現地指導会（於:馬路）
4/14	市町）街道現地調査
4/21～22	市）小泉和子氏家財調査現地指導（於:水上文化財収蔵庫）
4/22～23	市町）文化庁本中主任調査官現地指導
4/26	県）街道調査検討会議（於:仁摩）
4/29～5/11	市）宮の前銀精錬工房跡剥ぎ取り模型一般公開（於:町並み交流センター）
4/30～5/1	県市）田中琢・牛川・村上委員指導（於:奈良）
5/8～9	県市町）石見銀山遺跡調査整備委員会（於:大田市）
5/16	第1回県市町合同連絡会（於:県教委）
5/16	石見銀山シンポジウム（於:県民会館）
5/26	市）旧熊谷家保存修理現場公開（於:大森町）
5/30	第2回県市町合同連絡会（於:大田市）
6/2	市）第8回旧熊谷家保存活用検討委員会（於:大田市）
6/3	第3回県市町合同連絡会（於:県教委）
6/2～3	市）大田市伝建審議会（於:町並み交流センター）
6/2～3	市）小泉和子氏家財調査現地指導（於:水上文化財収蔵庫）
6/2～3	市）細見啓三氏伝建大森銀山地区修理修景現地指導（於:大森町）
6/3～	市）発掘調査開始。歴史的資料整理業務（緊急雇用創出）開始（於:大森町）
6/6	市町）街道指定打合わせ（於:大田市）
6/9	県市町）文化庁記念物課協議（於:文化庁）
6/10	県市町）文化庁建造物課協議（於:文化庁）
6/11	県）街道輸送関係調査（於:馬の博物館）
6/17	県）街道関係古文書調査（於:馬路）
6/18	第3回県市町合同連絡会（於:大田市）
6/19	歴史文献調査団）法専寺文書調査（於:大田市）
6/23～7/6	県）街道調査に伴う石造物調査（於:仁摩・温泉津）
6/26～27	市町）文化庁磯村主任調査官街道・集落現地指導
7/1	県）街道関係古文書調査（於:馬路）
7/1～2	歴史文献調査団）小割家文書調査（於:富田林）
7/7	県市）石造物調査部会（於:大森）
7/6	大森町）町内文化財一斉清掃
7/7	市）文化庁加藤調査官現地指導
7/7	県市町）石造物調査部会（於:町並み交流センター）
7/7	温泉津町）町並み工房（現地事務所）開設
7/9	文化庁熊本調査官旧熊谷家現地指導
7/11	県市町）第4回県市町合同連絡会（於:県教委）
7/11・25	県）街道調査に伴う建造物予備調査（浅川滋男氏　於:冠、清水）
7/12	

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

上半期・平成15年4月～平成15年9月

7/14	文化庁記念物課協議（於:文化庁）
7/15	県）街道調査　石見国絵図調査指導（川村博忠氏　於:東亜大学）
7/15～25	県）街道調査に伴う石造物調査（於:仁摩・温泉津）
7/16	県教育委員銀山視察
7/17	市）県議会総務委員会大森視察
7/18	第5回県市町合同連絡会（於:大田市）
7/22～23	文化庁伊藤調査官・保存管理計画策定委牛川氏現地指導
7/23	市町）第3回史跡保存管理計画策定委（於:大田市）
7/24～25	市）小泉和子氏家財調査現地指導（於:水上文化財収蔵庫）
7/27	広域）ふるさと体験ツアー「海から見た石見銀山」開催（於:温泉津港～大浦港）
7/31	県市町）街道・港湾集落史跡指定協議
7/31	県）街道関係古文書・歴史資料調査（於:馬路）
8/1	県知事部局職員17名文化財課に併任発令世界遺産登録推進室1名増員
8/3	市）市民の祭り「天領さん」大森会場
8/4～7	県）石造物分布調査（於:沖泊）
8/7	県市町）文化庁平澤調査官現地指導
8/17～21	広域）第2回石見銀山講座開催
8/18～20	県町）街道調査に伴う建造物調査（浅川滋男氏　於:冠、清水）
8/19	広域）小泉和子氏「熊谷家の家財とくらし」公開講座（於:水上文化財収蔵庫） 村井章介氏「外国人の見た石見銀山」公開シンポ（於:あすてらす）
8/20	県市）科学調査部会（於:国立三瓶青年の家）
8/22	県の併任者銀山視察
8/25～29	県市）石造物分布調査（於:大森町）
8/27～29	県）街道関係古文書調査（於:馬路神畑）
8/28	第6回県市町合同連絡会（於:県教委）
8/29	県市）石造物調査報告会（於:町並み交流センター）
8/末～	市）史跡佐毘売山神社本拝殿記念物保存修理開始（於:大森町）
9/1～3	県）石造物分布補足調査（於:大森町）
9/3～4	県）街道関係古文書調査（於:西田）
9/4～6	歴史文献調査団・市）熊谷家文書調査（於:市立図書館）
9/8	文化庁協議（於:文化庁）
9/8～9	県）街道関係古文書調査（於:馬路）
9/19	県）街道集落調査に伴う切り図調査（於:広島大学）
9/26～29	第6回国際鉱山ヒストリー赤平大会ポスターセッション参加
9/27	県）街道関係古文書調査（於:船橋市）
9/30	第7回県市町合同連絡会（於:大田市）

石見銀山遺跡の世界遺産登録に向けて

世界遺産登録推進室長　**岸本　豪郎**

石見銀山遺跡につきましては、地元大田市、温泉津町、仁摩町とともに世界遺産登録を目指し、平成8年度から発掘調査、文献調査、科学調査などの総合調査をはじめとし遺跡の保存・活用事業などの諸事業に取り組んできたところであります。

石見銀山の調査は、国内の鉱山遺跡調査としては例のない総合的な調査研究手法で解明に取り組み、数多くの新知見を得てきたところであります。

これらの調査成果の評価により、平成13年4月には世界文化遺産の暫定リストに登載され、続いて平成14年3月には「銀山柵内」をはじめとする国指定史跡の追加指定を受け、約320ヘクタールが指定地域となりました。

御承知のように、世界遺産の中には「文化遺産」と「自然遺産」、「複合遺産」がありますが「文化遺産」については、世界遺産の暫定リストに登載されているものの中から推薦されることとなっています。

現在、暫定リストに登載されている日本の文化遺産は、石見銀山遺跡をはじめとし、「彦根城」と「古都鎌倉」、「平泉の文化遺産」の4件あります。

一方、自然遺産は平成4年に「白神山地」と「屋久島」が登録されて以来日本からは推薦されていない状況であり、今後は自然遺産も推薦していくという動きがあります。

具体的な自然遺産の候補としては、「知床」と「小笠原諸島」、「南西諸島」があがっていると聞いております。

こうした世界遺産の候補がある中で、石見銀山を早期に推薦してもらうよう「銀山街道」を国史跡指定に追加指定してもらうなど残された課題の解決に向けて、県では大田市、温泉津町、仁摩町とともに取り組みを進めているところであります。

世界遺産登録に向けて行政だけが取り組みを行っても、結果的には登録されるかもしれませんが、単に世界遺産になっただけで終わるかもしれません。

やはり地元の方が石見銀山遺跡を良く理解し、人類共通の宝物として未来の世代に引き継いでいくのだという気概を持ち、遺跡の保存や整備活用について行政と一緒に考えていただけるようになればありがたいと思います。

すでに「世界遺産を目指す会」などの団体でそういった取り組みをしていただいているところですが、こうした気運が県民の皆様に高まっていくことが、世界遺産登録のまた、登録後の最も大切なことだと考えています。

今後とも地域の皆様方の御理解、御協力をいただきながら、1日も早い世界遺産登録が実現するよう取り組みを進めてまいりたいと考えております。

石見銀山遺跡ニュース第6号　2003年11月1日発行　編集発行／島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会 TEL0852-22-5649